

〈追悼文〉 ”紅く咲ちみせみ”

山本, 茂男

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

9

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

1995-02-24

“紅く咲ちみせみ”

山本茂男

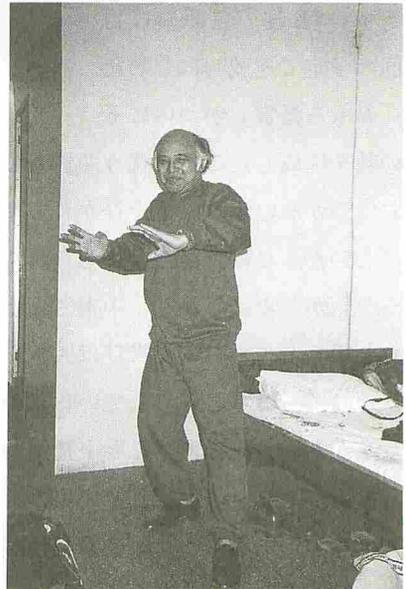
中本正智さんの容態が悪化していると知らされたのは、旅先のベニスの宿で日本へ電話をしたときのことだった。1992年の夏、私は長年勤めた出版社をやめて、あてのない旅に出ている。

中本さんは、最初、胸を手術したときも「ちょっと腫瘍を取っただけさ」と言っていたし、事実、半年もせずに全快して、また酒が飲めるようになった。その冬には、沖縄文化研究所の比嘉実さんと私と3人で中国福建省へ旅行している。その翌年、再入院したときも「疲れたんでしょう」と、まわりではあまり深く考えてはいなかったものだ。しかし、ホテルの狭い一室で中本さんの容態についてきいたときには、ひどく胸さわぎがした。

その後、私はイタリアでジェノアから進路を西にとり南仏を通してスペインに入った。オリンピックさわぎのバルセロナには1日ただけで脱出し、山道の鉄道でバレンシアからアランフェスへとなお西に向かっていたときのことだった。ふっと、中本さんの倅が立った。

茶色に枯れたヒマワリ畑、瘤だらけのオリーブの古木、深くえぐられた涸沢の白茶けた岩肌に点々と咲く夾竹桃の赤い花などを窓からぼんやり眺めているとき、突然、中本さんは死ぬのではないかという予感におそわれた。ついこのあいだ、また一緒に外国へ遊びに行こうなどと話していたばかりなのに。

車窓の景色を目で追っついでながら、突然、鼻先がつうんとしてふっと涙が出てきた。そして、ぼろぼろ、ぼろぼろとうすら塩からい水滴が後をついで流れてきた。私はあわてて窓ガラスに額をくっつけた。ほぼ満員の車内の誰かに、1人旅の初老の東洋人のそんな様子を気付かれたくなかったからだった。死が私と中本正智とを分かちつという、そんなことが起ころうとしている—こう思うと、むやみにこみ上げてくるものがあった。私は小1時間じっと顔を窓ガラスにくっつけたまま、ぼやっとくもった眼のレンズで荒れた風景を見続けていた。



1991年12月中国旅行で。元気な姿の中本正智さん。

3か月の放浪を終えて、私はその秋日本へもどってきた。ところが帰ってみると、中本さんの病状はかなり回復していた。月に何回かの大学の講義にも車イスで出ているという。そして、10月に新宿の飲み屋で催された「おもろ百回記念パーティ」（月刊『言語』に百回の予定で連載しはじめた「おもろ鑑賞」がついにそ



鹿児島国語学会の折り。カラオケ酒場で。

の数を達成したことを祝う関係者のパーティ)には奥様に連れ添われて姿を現わした。まだおぼつかない歩みで手をひかれてやってきたが、なに、けっこう話もし、酒も飲んでいるのではないか。私は、何だか裏切られたような気がした。旅先であんなに泣いて、そんなをしたような気がした。しかし、中本さんが元気になって、一緒にまた飲んだり旅をしたりできるのだと思うと、もちろん喜びは大きなものだった。

そして、ほっと安心している年の暮ちかく、様子が急変して近所の救急病院に入ったと知らせがあり、比嘉実さんと上福岡の病院に駆けつけた。

検査があったので疲れているのです、と奥様は説明してくれたが、酸素吸入のマスクをして、意識があるのかないか目は開けているが焦点が定かでない。私はこうなるともうだめで、顔を正視することもできない。比嘉さんは枕もとに立ち、あたかも肉親にでもするように額に手でふれたり頬を指で押したりしている。見舞いというのはこのようにするものかと、自分のいくじなさがなさけなくなった。

帰途、私は比嘉さんに「中本さん、われわれのこと分かったでしょうかね」と、たずねてみた。すると比嘉さんは「ええ、はっきり分かったでしょう」と自信ありげに答えた。「目にずっと涙が浮んだのが見えましたから」ということだった。

年があけて、比嘉さんから電話をいただいた。中本さんの見舞に行ってきたという。この前にくらべずっと落ち着いていて、お話もできたということだった。そして私は、またほっとする。あれは、きっと良くなります、比嘉さんはこうつけ加えて言われた。

私もそう信じていた。だが、死は突然やってきた。2月25日、また比嘉さんからの電話……、昨夜亡くなられました、と。何というあっけない終りだ。

実際には、中本さんにとっては長い闘病生活だったのだろうと、改めていまは思う。あの頑強な肉体だったからあれまで耐えてこれたのだと、多くの知人の方々が語る。苦痛の伴う

治療だったということだった。これで苦しみから解放されたということなのだろうか。

中本さんとは国内でよく地方学会で一緒になり、行動をともにした。

富山市の秋の国語学会でのこと。最終日、山田孝雄博士の墓に詣で、帰りの汽車を待つ間、駅前魚市場をのぞいた。

中本さんが大きなタラの頭を見つけて、「この目を見て下さい。まだ生きています」と指した。ひとかかえもある真ダラで、つり上げると肝と胃袋をぶらぶらさせている。これが値打です、と沖縄の漁師の家に育った中本さんはうれしそうである。店の人も、チリ鍋にするとおいしいですよ、とすすめてくれた。私たち



ウィーン留学中の仮装パーティ

は、ためらうことなくそこに並べられた頭を1つずつ買い求めた。考えられない安値だった。

タラを手にした2人が、北陸線からできたばかりの上越新幹線にのりついで、何とか夕食にまに合うように帰路をいそいだことは言うまでもない。帰宅した私が家族とともにタラ鍋をつついていると、そこに電話だ。

「胃袋の中に何が入っていた？」と、一杯きげんの中本さん。

「胃袋の中は、とけたイワシだよ」それをとり出して、胃袋を洗って湯通しして酢醤油で食べている、と私は答えた。これは、広島でカワハギを食べたときに教わった方法である。

「胃袋の中は？」と、また中本さん。

「だからイワシ」と、私。

「そのイワシ食べた？」

「食べられっこないよ。とけてるんだから」

中本さんの方の胃袋には、新鮮な甘エビが四十匹ばかり入っていたそうで、これが冷蔵庫に保存されていたのと同じ状態だったという。

中本さんにはいろんなエピソードがある。池袋から上福岡まで東上線の車内を踊り廻ったとか……。沖縄の人の例にもれず、歌と踊りが好きだった。飲み屋の2階で、よく「谷茶前」^{タンチャメ}をティサジと權をもって男女二役で踊ったものだった。沖縄の言葉に“遊び人”^{アシビンチュー}というのがあるそうだが、きっとこんな人のことなのだろう。だけどあんなに遊んでばかりい

た人に、あれだけの大きな著作・業績があるのは不思議でならない。いつ仕事をしたんだろう。



1986年タイ旅行中。国境警備隊員と言い争う中本正智さん。

告別式のあとで奥様が、中本さんが右手指に紐でペンをくくりつけて徹夜で執筆する姿を語られたとき、私は“遊び人”中本正智のもうひとつの鬼のような顔をかいま見たような気がした。夙に琉球方言韻史の研究を世に問い、次いで琉球方言地図を完成し、その上に日本列島言語史の再構にいとむという大業にそそぎ

こまれた労力は並大抵のものではなかったはずだ。

さらに、中本さんの学問はこの業績を土台として、東アジア全域にわたる言語地図の作成、進んでは環太平洋の言語と文化の推移を解説しようとしていた。この用意の周到さとスケールの大きさを、私は憶測で言うのではない。これは中本さんの口から何度も聞かされたことで、しがたい出版編集者として私自身どれだけこの影響をうけたことか。

言語分布というミクロな事象に関りあいながら、言語史というマクロを再構するというのが中本さんの一貫した姿勢（言語地理学者としては当然であろうが）であった。その視野の広さと射程の大きさは稀に見るものであった。そのための不備を指摘されることもなきにしもあらずだが、私は中本さんの仕事に性急な評価を下すべきではないと思う。中本さんの仕事は、局部、局部とすぐれた完成をみせながら未完のある大きなものに向かっていて、私はそんな風に理解したい。細かな不備はいずれ修正されるものだった。

そのことから、学問の半ばで倒れねばならぬとは、かえすがえすも残念でならない。

中本さんを彷彿とさせる、ひとつの旅の出来事がある。

1986年、北部タイを大修館書店の私の友人N氏と3人で旅行したときのことである。バンコクから汽車でチェンマイまで行き、そこで車をやとって奥地のチェンライからいわゆるゴールデントライアングル黄金三角地帯（ビルマ・ラオスとメコン川をへだてて接する国境の地、アヘンの産地として知られ麻薬の密売地域とも言われている。少数民族の居住地が、その周辺に点在する）へ入った、その帰途のことである。

タトンという町からメーコク川をボートで下るルートがあり、私たちはこれをとろうということになった。折から前夜の雨のため川は増水して急流となっていたが、舟は出た。

私たちは同行の日本人3人で一艘かりることができたが、出発の直前になって武装した国境警備兵が2人乗りこんできた。ところがこの2人とも酒気を帯びていて、ことに若い方はもうべろんべろんという有様である。胸のチョッキから、いろいろ小型の武器やらはては手投弾などまで取り出して得意気に見せびらかす。そして、何やら大声で私たちに話しかけるのだが、それが英語らしいと気がつくにはかなりの時がかかった。

そのうち、若者が中本さんにつかみかかるようにして何かわめき出した。中本さんも意味が通じているのかどうか知らないが、大声でそれに応じている。と突然、轟音がした。若者が宙にむけて発砲したのだ。私は本物の銃が目の前で火をふくなんて経験は初めてだから、腰をぬかさばかりである。一瞬、みなおしだまってしまった。国境の急流で、対岸の崖の上に誰がいるのか知れぬのに……、お返しに1発狙撃弾でもくらったら……、と肝が冷えた。さすが、年上の男が若者をとりおさえた。

若者はしばらくじっとしていたが、ある部落に近ずき舟がそこに着こうとしたとき、ふらふらと立ち上ってバランスを失し、うしろむきにドブと川へ落ちてしまった。ありゃありゃと皆で手をさしのべて舟に引きずりあげたが、南国とはいえ北部の1月である、その後の若者は唇を紫色にしてびしょぬれの身をちぢめ、舟のへさきにぶるぶるふるえるだけであつた。さぞかし酔いもさめたことであろう。

ともかく目的地に着くと、2人の警備兵は先に降りて行ってしまった。私たちも舟をあとにして、舟着場のレストランに入った。ここでドライバーと待合わせることになっているのだ。

人気の少ないレストランの、河畔にのぞんだテーブルに私たちは席をとった。そのとき、中本さんがにやっと笑って右の掌をあけて見せた。そこに黄色に光っているものが3個ある。銃弾だということぐらいは私にもわかったが、どうしてそんなものがここにあるのか。きょとんとしていると、さっきの若者の銃からこっそり抜きとったのだという。あんなぶっそんなことが2度とできないようにしておいた、のだそうだ。

銃など手にとったこともない私には、それは手品みたいに思えた。銃や弾丸が日常の玩具だった敗戦時の沖縄の少年だったから、と中本さんはさり気なく語った。そして、ぼいと急流のメーコク川に弾丸を投げ捨てた。中本さんには細心と大胆が共存している。その資質は、先に述べたように学問のあり様にもよく表れていると思う。中本さんと言えば「胆大心小」という言葉を思い出す。

中本さんと比嘉さんと3人で、夜の糸満（沖縄本島南部の港町）へ散歩に行ったことがある。月明りの下、漁船の繋がれた埠頭を歩きながら誰いうとなく、今宵を記念して「糸満の夜」という歌を共同で作詞・作曲しようということになった。ああでもない、こうでもない、とやっているうちに、「ハワイの夜」に似たあやし気な旋律にこれもあやし気な歌詞ができ

かけた。

へ糸満の夜

女は乱れて

男は死ぬよ

ところが中本さんが、この三句目の「男は死ぬよ」は間違っている、と言ってゆずらない。「男は生きるよ」とならなければ糸満漁師の肝心イナマンは言い表わせないと注釈付である。結局このときは、見解の相違ということでもの分れのようなことになった。

この歌はのちのち新宿2丁目あたりの酒場ででも何度か唱われるのだが、最初の上2句は3人で歌うが、三句目は私と比嘉さんだけがまず歌う。するともう1度、中本さんが自分のヴァージョンをリフレインするというような形式が成立した。

その後、1991年の暮から新年にかけて3人で中国旅行をしたが、このときも盛んに「糸満の夜」を歌った。

この旅行は「琉球進貢使の道をたどる」（もちろん一部分であり、北京までの全行程ではない）というもので、車で福建省の廈門から泉州、福州を通り、当時観光未開放地区の古田、南平、建陽、浦城と追ひ、峻険の仙霞嶺を越えて浙江省杭州に抜ける一種の体験旅行である。途中、建陽で何十年に1度という大雪に見舞われ、結局このときは仙霞嶺越えは果せず、夜汽車で杭州へ向かうことになるのだが、ちなみに翌春、比嘉さんが単独でこの仙霞嶺越えを果している。

すっぱんや果子狸、穿山甲というような小動物や衣笠茸というような珍味、風味に舌つづみを打ちながらの旅で、中本さんも大いに飲み大いに食い、とても病み上りとは思えなかった。大きなトランクを車からホテルへ運び込むときなども私たちが手伝おうとすると、いや、自分でできます、と言って許さなかった。アルコールが入って、ときおりことばが乱れることがあっても、私たちは「言語学者もついに言語障害か」などとからかいつつも、なぜだろう、かえってそれが全快の兆候だと思ったのだった。さすが酒量は往時の如くとは言えなかったが、その点では同じ1936年生れの私だってそんなにいばれたものではない。お互いに歳なんだと、私は感じていた。

そのかわり、各地で盛んな社交ダンスには積極的で、ホテルに着いて食事がすむとすぐ、ときには食事の前に、中本さんが先頭で私たちは、町のダンスホールへ必ずでかけるのだった。ダンスホールと言っても、奥地では青年宮という名の青年団の集会所であったりする。中国では、ダンスが男女交際の正しい道とされているらしく、夜遅くまで若い人たちが集っている。心配したのは、女性をめぐって町の若者たちとトラブルでも起きないかということだった。もちろんそんなことはありはしないのだが、それくらい元気だった、ということである。

中本さんのダンスに対する自信は、生来の沖縄踊りのセンスに、ウィーンの洗練を身につ

けたと思いこんでいるところから来ているらしい。事実身のこなしは軽い。比嘉さんは、ときどき女性の足をふんでいた。私はというと、べったりパートナーにしがみついているだけである。

この旅で杭州に着いた翌日、比嘉さんが何か用事があるというので、私と中本さん2人で紹興へ日帰りのツアーをした。紹興は、杭州から車で1時間ばかり。魯迅の生家のあるところ、かの紹興酒の産地として有名なところである。

魯迅ゆきつけの飲み屋というのが再建されていて、そこでは紹興の銘酒をお碗で飲ませた。瀟洒な居酒屋風の木のテーブルで私たちは、これはうまいと、2人でお替りをしたのをおぼえている。あのときは、まだ元気だった……まだ、まだ、元気のはずだった。

旅も終りの、あれは北京の和平賓館で、3人して食後のワインをのんでいるときだったろうか。雑談にまぎれて中本さんが、ふと、「あれ、やっぱり、男は死ぬよ、でいいかな」とつぶやくように言った。私たちには例の「糸満の夜」のことだとすぐわかった。私も比嘉さんも即座に、いや中本さんには中本風の「男は生きるよ」こそふさわしい、と告げた。しかし、軽々しく妥協するタイプの人ではないだけに、自説を折ったのが私には妙に心にかかって残った。恐らく比嘉さんもそうではなかったか。

新宿のアワモリを飲ませる店でよく朝方まで飲んでいたころのこと、中本さんの反戦の決意を聞かされたことがある。

「われわれが、自分たちの国や、自分たちの妻や妹を、自分の手で守らなければ、一体誰が守ってくれるのだ」と言って、国は若者を戦いに追いやるが、妻や妹はほんとうにそんなこと望んでいるのだろうか。絶対にそんなはずはない。たとえ身を汚されても、父や兄が戦場で死ぬよりはいいと言うのに間違いない……。

権力は、閉ざされた密室で神話を作り上げる。父や兄の命というものについて、私たちは本当に女性たちと開いた心で対し、話し合ったことがあるだろうか。女性の貞操という国家の神話をうちこわすのは、あの沖縄の惨状を通り抜けた人でなければならなかった。反戦というよりもずっと深いところで、戦争というものを見つめた中本さんの態度は、非戦というべきものであろう。

思い出はつきないのだが、中本さんが私に残していった言葉がある。それを最後に引いてペンをおくことにしたい。

1990年に大著『日本列島言語史の研究』が上梓されたとき、私は中本さんの手からそれをいただいた。見返しの献辞には、

紅く咲ちみせみ

と、墨くろぐろと遺っている。「紅く咲いていますか」とは、島言葉で「赤花」と呼ばれるハイビスカスにこと寄せて自身の真情を吐露したものであったかと、中本さんを追憶する中で、今はじめて謎がとけた思いがある。

(月刊『日本語論』編集人)